「今後 10 年のエネルギー」に向けて

『利他』と『共創』の星・地球へ

株式会社エクソル 代表取締役社長
JPEA 理事兼「地域共創エネルギー推進委員会」委員長　鈴木 伸一

今から丁度 10 年前、私は（一社）太陽光発電協会〈JPEA〉の事務局長として就任して丸一年を迎え、日本の FIT（固定価格買取制度）スタートからほぼ 2 年が経過し、太陽光発電フィーバーと呼ばれた爆発的な普及の渦中にあって、フィーバー故に明らかになってきた様々な課題や批判への対応対策のため、資源エネルギー庁はじめ関係機関の方々と日々協議を続けていた。「九電ショック」と呼ばれる系統接続問題やその後の出力抑制問題が顕在化する約半年前のことである。
その半年前に当時の下村節宏代表理事と出席した総合資源エネルギー調査会において、委員の方から突然出た「FIT の産業用買取価格が 20 円を切るのはいつ頃だとお考えですか？」に、代表理事と席上 5 分間の協議の末、「5 年後（2018 年）にはそうありたい、と考えております」と答えて頂いたことを鮮明に思い出す。
そして、5 年後の 2018 年、買取価格は税込 19.8 円 /kWh となった。

あれから 10 年、一時は「早くももう終わりか」と言われた太陽光発電は、予定通り FIT のほぼ終焉を迎えた今、FIP へのハンドオーバーは少し足踏みしているものの、順調に Non-FIT へと軸足を移し、普及拡大量を伸ばしている。
今、将来への課題とされている項目は、既に 10 年前に予想され、当時既に解決策への議論検討が始まっていたものばかりだ。その時の結論も変わっていない。
「制度は神様が創ったものではない。完璧はあり得ない。フィロソフィーが誤っていなければ、制度の未熟さは、技術と価値観、行動の進化によって必ず解決される」である。
フィロソフィーの正否とはなにか？
「利他」の志がどれくらい上回ってそれを支えているか、である。
勿論、紆余曲折はあった。しかし、実際、10 年を経て、その通りになっている。これは大きな「変化」であり「進化」である。

しかし、10 年間一向に変わっていない課題もある。
それは依然として、世界の一部でしか産出されない化石燃料が主流であることにより、否、一層、日本という国（だけではなく様々な国が）がエネルギー弱者であり、一見、神様？のお計らいによって不自由せずに豊かさを享受しているように見えるが、常に、実はギリギリの状態でいつエネルギーが途絶え、人々の生命が脅かされてもおかしくない、という状況だということだ。

そしてそれは、人類の「悪想念というエゴ」によることで引き起こされている、ということが、2 年前からのウクライナ・ロシア戦争によるエネルギー・ショックで更に明らかになり、一方で、地球の異常気象をはじめとする天変地異は予想通り着々と進行している、ということだ。
人類はこのままでは自らの手で自らを滅ぼしてしまうだろう。

では、これからの 10 年、私たちは何をせねばならないか。もう自明であろう。

『自給自足の分散化エネルギー・電源の確保と普及』である。別に太陽光発電でなくともよい。講演等でいつも言っている通り、昔の井戸水の如く、分け隔てなく、消費する者たちがそれぞれ自分たちのすぐそばで、使う分を創り確保する、それだけだ。もし、SF の世界のように、核融合技術の進展により、各戸に本来の安全な、マイクロ核エネルギー発電装置が常備されるならそれでもよい。

未だに、旧態依然とした原始的（武器として開発された）技術のままの大規模原子力発電をセキュリティ・レベル最低度の系統網を経由して配電する方法「のみ」に固執する硬直的思考の議論が残存しているようであるが、まさしく小学生レベルの発想・議論であると言えよう。

我々が「XSOLUTION」で提唱した通り、そうすれば、地球から国際紛争・戦争は激減し、世界中の人々が分け隔てなく潤沢で必要十分（足ることを知る、の如く）なエネルギーを享受でき、地球環境も劇的に改善されるであろう。
理不尽に命を奪われる子供たちがいなくなり、無電化地域で不自由な生活を強いられる人々もいなくなり、何より、これまでいかに無償の愛で我々を生かしめてくれたか、という地球という星への感謝を取り戻し、自らを滅ぼす、という最大の愚行・業（カルマ）から人類は解放される。

そう、地球人は本来の姿に立ち戻ることができる。

「悪想念・エゴ」から「利他と感謝・共創」の次元へと進化発展することになる。
10 年で、とは言わない。せめて 2050 年までには、そんな理想の星・地球にしたいものである。